

星空でつながる

「お邪魔します」元気な声がした。

「よろしくお願いします、どうぞ中へ」私は笑顔で彼らを招き入れた。

ドアの向こうから、四十代前半のリーダーと思われる男性と、バイトらしき若者が入って来た。リーダーの男は一見華奢そうに見えるが、屈強そうな腕が仕事の大変さを物語っていた。

会社勤めをして三十八年、ようやく念願の定年退職になる。この部屋の荷物が片付けば、あとは自宅へ帰るだけだった。

「これはどうしますか？」リーダーが私にたずねてきた。

「それはそのままにしておいてください。私がカバンに入れて持ち帰るので」写真立てを指さしながら、私はこれまでの人生を思い返していた。

私は北関東の田舎町で生まれ育った。生まれてから小学、中学、高校はもちろん、大学まで地元の学校だった。

そして、大学一年のとき妻と出会った。妻も同郷で、お互いの実家もそれほど遠くはなかった。出会いは旅同好会というサークルだった。といいながら特に旅行するわけでもなく、講義が終わるとみんなで集まってダラダラと話をすることが唯一の活動だった。

そんなサークル活動を繰り返すうち、妻との距離が少しずつ縮まっていった。何となくノリが合うとか、そんな感じだったかもしれない。付き合いはじめたのは、三年の終わりだった。当時は結婚など意識していなかった、と思う。今となっては、思うとしかいえない。

私達は、よく一緒に星空を眺めた。とはいっても二人とも星座音痴だ。見つけたのは北斗七星。小学校の理科の授業で習い、それだけは覚えていたからだ。一年中見えることもよかった。

「今日ははつきり見えるよ」

「そう？ 昨日とあんまり変わらないけど……」

肩を並べながら、そんな話をしていただけのような気がする。それでも、いつしか星空を眺めることがルーティンになっていった。それは今でもずっと続いている。

大学を卒業すると、私達は地元の会社に就職した。私は工場の研究職に就き、妻は会計事務所の事務員になった。

入社直後から私は多忙を極めた。当時は働き方改革などない時代だ。「二十四時間働けますか？」と聞かれれば、「もちろんです」と答えるのがビジネスマンの証だった。

そんな多忙ななかでも、妻とはできる限り会った。休日出勤も少なくなかったが、会えるときは必ず会った。そして一緒に星空を眺めた。

そして、社会人三年目の冬、私達は結婚した。二人とも二十五歳だった。当時でも決して遅くはなかったが、特段早婚でもなかったように思う。それから二年後、二十七歳で息子を、三十歳で娘を授かった。妻は娘の誕生を機に退職し専業主婦になり、私が家族四人の生活を支えることになった。

そして、入社して九年目になるうとする春だった。上司から突然声がかかった。

「今度転勤してもらおうことになった」

動揺を隠せない私に上司は付け加えた。

「八年も地元いられたんだ。ありがたいと思わないとな」

入社するとき、転勤はないと聞いたような気もするが、会社の方針なんてそんなものだろう。八年がありがたいかは別にして、私は言い返す気もなかった。

「それにな、単身赴任はあんがiiiiいもんだぞ。誰にも文句言われず、自由気ままに生きていけるから」

娘は生まれたばかりで、息子は私と遊ぶのを毎日楽しみにしていた時期だった。自由気ままな生活より大切な生き方があることを伝えたかったが、高度成長期を生き抜いてきた管理職には「馬の耳に念仏」にしかならないことはわかっていた。

「そんなもんですかね……」

「なんだよ、その言いぐさは」

上司の喧嘩口調を無視して、軽くお辞儀をして私はその場を去った。

家に帰ると、私はさっそく妻に不満を吐き出した。そんな私を、妻は驚いた様子も見せず、あっけらかんとして言った。

「そろそろかなって思ってた。会社なんてそんなもんじゃない？ それに……」

妻が急に私の目を見た。

「どこにいたって、同じ星、見えるでしょ？」

「そりやそうだけど……」

「どうしても無理になったら、そのとき帰ってくればいいんじゃないの？」

終身雇用・年功序列が当たり前の時代だ。特にやりたいこともない優柔不断の私が、簡単

に踏ん切りを付けられないことも見透かされていた。

「とりあえず、向こうで頑張ってみるよ。どうせ二・三年で戻ってくるだろうし」

三十歳で初めて経験する一人暮らし。私は、妻に軽く背中を押されて覚悟を決めた。それが転勤人生の始まりだった。

二・三年で戻るといふ甘い考えは、いつの間にかあきらめが変わっていった。

私は転勤と同時に研究職からエンジニア職に職種を変えた。それまでのように自社製品を研究開発するのではなく、できあがった製品を安心して使ってもらえるよう保守点検する役目だった。この仕事の変更は、私にとって大きなターニングポイントだった。

最初の転勤先は、日本一大きな湖の見える街だった。

その街で顧客と接するうち、本当に使いたい製品がどんなものかがよくわかった。研究職の自己満足で入れた機能なんて何の意味もないことも実感した。製品は、気持ちよく使ってもらってこそ価値があるのだと感じた。

そして私は、五年ごとに転勤を命じられた。縁もゆかりもない土地を都合六箇所。新しい場所に戸惑いながらも慣れてくると、待ってましたとばかりに転勤になった。

「会社ってのは、血の入替えが必要なんだよ」

血の入替えか。会社ってのは、そこまで病魔に侵されるものなのか。そう思いながら、いろいろな場所でいろいろな人と出会ううち、その言葉がまんざらでもないと思えるほど、私は酸いも甘いも噛み分けられる体質になっていった気がした。

しかし、そんな私でも、どこに転勤しても家族と同じ星空を見ることがだけは欠かさなかった。それが私の一番の原動力だった。

「こっちはキレイな北斗七星が見えるよ」

「おとうさん、ボクだって北斗七星見えてるよ」

「わたしも、お星さま見えるよ」

電話越しに幼い息子と娘が妻と一緒に星空を眺めている情景を思い浮かべる時間こそ、私の安堵のひと時だった。同じ星空を見ている——そう思うだけで元気になれた。

私は、妻と出会ったときからずっと、星空でつながっていたのだ。

二番目の転勤先は、日本の屋根、蕎麦おいしい街だった。

三番目の転勤先は、南国、ヤシの木の見えるマンゴーのおいしい街だった。

四番目の転勤先は、うってかわっての北国。キリタンポ鍋が格別の街だった。

五番目の転勤先は、日本屈指のうどんの街だった。

そして六番目、最後の転勤先が東北最大の街だった。

どの転勤先にも、妻は旅行がてら子供たちを連れてやって来てくれた。もちろん普通は連絡はあるが、時折気まぐれでやって来たりもした。そして、整理整頓ができていないことを愚痴りながら、一緒に部屋を綺麗にしてくれたものだった。

振り返るといろいろあった。製品トラブルで顧客の社長に怒鳴られたこと。徹夜の復旧作業中、お腹が空き過ぎて、顧客の担当者とこつそり抜け出してラーメンを食べにいったこと。大型休みしかできない保守作業で、顧客先で除夜の鐘を聞いたこと。

あんなに苦しかった出来事が、今となっては懐かしさに変わっていた。

そんな会社員人生ももうすぐ終わる。

「いい写真ですね」

私が写真立てを手に取ったとき、引越しリーダーが声をかけてきた。

「ありがとうございます。これは新婚旅行のときなんです」

「お二人ともいい笑顔ですね。お似合いのご夫婦でうらやましいです」

お似合いか……照れる年齢ではないが、不思議と悪い気はしなかった。

「初めて付き合ったのが妻なんです。就職してから結婚したんですが、数年で単身赴任になってしまって……今年還暦、あつという間に定年です」

引越しリーダーは驚いた顔で私を見た。

「ずっと奥さまと離れて単身赴任されていたんですか？」

「そうなんです。全国六箇所転勤しました。ここが最後、いい街ですよね」

「都会でもなく田舎でもなくって感じですよんね。っていうか、いちおう東北では一番栄えてますから。私の自宅はもつと北の方で、とんでもなくド田舎ですけど」

引越しリーダーは苦笑いした。

「そんなサラリーマン生活も今日で終わりです」

「戻ったら、何されるんですか？」

「余生は家でのんびりしたいですね」

「オレも早くそうになりたいな。つて、まだまだですけど。今までお勤めお疲れ様でした。暗くならないうちに終わらせませすね」

「よろしくお願ひします」

私は、手をつなぐ写真を見た後、大きく息をして鞆の中にしまい込んだ。

窓の外には夕焼け空が広がっていた。そのなかに一つ、光るものを見つけた。

一番星だった。考えてみれば、こんな早い時間に空を見上げることはなかった。

しかし、これからはいくらでも見られる。そうだ。北斗七星を見上げる前に、宵の明星も妻と一緒に見つけることにしよう。いや……夕食で忙しい時間にそんなことを言い出したら怒られるかもしれない。それでも言ってみよう。

宵の明星、金星、別名ビーナス。気まぐれビーナスに「一緒に見つけよう」と。

その晩、私は新幹線で自宅に戻った。もうどこにも行かされることはない。「ただいま」

「おかえりなさいませ」妻はこういう場面ではなぜか敬語になった。

「無事に終わりました」私も丁寧語で返した。

「はい、ご苦労さまでした」

言葉とは裏腹に、妻は軽く受け流していた。妻は場面によって、応答のカタチを変えてくる。神妙に接してくるのか、そうでないのか——今でも私にはよくわからない。

しかし、それが妻のいいところかもしれない。まさに気まぐれビーナスだ。

これからは、その気まぐれにとことん付き合っていこう。

「そういえば、これ見て」

妻が白い紙を私に手渡した。それは日本の白地図、息子が小学生のとき、「おとうさんのいる場所に赤マルを付ける」と言って買ったものだった。

「おとうさんのいた場所に赤マル付いてるでしょ？ 何か思わない？」

「どういうこと？」

「そういう感覚、ほんと鈍いよね。何かに似てない？」

そう言われて、私は白地図を凝視した。

何だろう？ 転勤先の六箇所と自宅のある街、七箇所に赤マルが付いていた。

「まだわからないの？」

そう脅されて、私は初めて気づいた。その瞬間、「あっ！」と叫んでいた。

「あい変わらず遅いね」

七つ赤マルを北から結んだら、日本地図に星空が見えた。

私の会社員人生そのものが北斗七星だったのだ。

「ねえ、これってすごいよね！」

興奮冷めやらぬ私は大声を出していた。

そんな私を無視して、気まぐれビーナスは何事もなかったように、キッチンに向かっていった。(完)